

SDGs 実現に向けたトリプルボトムラインベースの価値創造

団体名●梅田ゼミナール(2年生・3年生)／代表者名●梅田充(経済学部経営学科・講師)

はじめに

企業は、経済価値の追及だけでは持続可能な発展が望めなくなっている。昨今ではSDGs経営がもめられ、社会と環境から受ける影響、またそれらに与える影響が大きくなりダブル・マテリアリティを取り入れた経営が企業成長のカギとなる。本活動では、株式会社日本海開発と連携して、トリプルボトムラインベースで企業価値の再考を行った。

活動内容

株式会社日本海開発は、廃品回収事業を営んでおり、事業を通じて循環型社会の形成を目指す企業である。

第1回目の打ち合わせは、日本海開発本社で行った。その後、蔓延防止条例発令により遠隔で活動を行った。

まず、日本海開発が考える現状の企業価値観とSDGs実現に向けた将来の企業価値観について話し合いを行った。日本海開発では、持続可能な循環型社会の形成をミッションとしていることが分かった。また、廃品回収という事業内から本業が環境価値と密接に関わりあう企業であることが分かった。

次に、経済価値、社会価値、環境価値の同時追及によって持続可能な社会を形成するというトリプルボトムラインを基礎として、日本海開発の事業内容を分類した。分類の結果、上記のように事業上の特性から経済価値と環境価値の同時追及されていることが分かった。さらに、資源ごみの問題を地域の小学生に向けて講演を行ったり、海岸清掃を行うといった社会活動も行っていった。これらの活動は、一過性のものではなく、本業と密接に関わり、日本海開発が掲げる循環型社会の形成というミッションから導かれた活動である。つまり、経済価値と社会価値の同時追及であり、言い換えればCSV(created shared value)を追及しているといえる。

しかしながら、これらの活動がどのような関係性があるのかについては明らかになっていない。そこで、南社長、社員の方々、ゼミ生とで戦略マップを用

いてこれらの活動の関係性を示し、戦略から落とし込まれた活動であることを再認識した。

最後に、これからの新規事業について、話し合いを行った。話し合いの中で、着物を廃品として回収していること、海岸清掃で集められるごみの多くがプラスチックごみであることに着目した。そして、着物や海洋資源ごみをいかにビジネスにするのかについて議論を行った。

成果、結果の考察

本活動の成果は以下の3点である。第1にSDGs推進のためには、トップの明確なビジョンが必要であることが分かった。日本海開発が本来、環境問題と密接に関わりがある事業を行っており、南社長自身が従前より環境や社会に対する問題意識を持っていた。そして、これらの問題をいかに本業で解決しようか考えていたことで、お題目にならない実現可能性が伴っていた。第2に、トップのビジョンと社員の意識の関係である。両者の議論によって、社員は自身の仕事は単なるタスクではなく、社会貢献につながるという意識が醸成できる。第3に、本業を軸とした新ビジネスである。企業である以上、経済価値の追求は絶対である。そこで、着物や海洋資源ごみの問題といった本業を通じて露わになった課題をいかに本業に取り組むかを議論することができた。

今後の課題、展望

トリプルボトムライン実現にむけて、今後、いかに新規事業を展開するのかについて取り組んでいきたいと考える。